

## 第 2 回 COI2021 会議開催 – 次世代の種はいま、まかれた

全国の COI (センター・オブ・イノベーション) 18 拠点の大学や企業から、次世代を担う若手研究者や URA (ユニバーシティリサーチアドミニストレーター) などが集う「COI2021 会議」の第 2 回会議を、2017 年 3 月 18 ~ 20 日の 3 日間、北海道大学 COI 『食と健康の達人』拠点の本拠地「北海道大学フード&メディカルイノベーション国際拠点 (FMI)」(札幌市北区) で開催しました。COI2021 会議としては 16 年 1 月の第 1 回会議以来の大規模なイベントで、初めて北海道大学 COI がホスト拠点を務めました。若手研究者や URA などのほか、COI STREAM ガバニング委員会の小宮山宏委員長、構造化チームメンバーで研究アドバイザーの水野正明・名古屋大学総長補佐ら、COI を運営、推進する有識者含めて約 100 人が参加。提案型プレゼンテーションに続き、グループ分けを行ってのワークショップと発表など、熱のこもった実践的ディスカッションが行われました。



## COI18 拠点を横断する「若手」という軸

COI2021 会議は、全国 18 の COI 拠点に参加する研究者や URA などに、「若手」という切り口で“横串”を通す試みとして、15 年度にスタートしました。その名称は「現在の COI 最終年 = 2021 (平成 33) 年」に由来し、それ以降の次世代を背負う人材と研究テーマの発掘、育成、創造やイノベーション創出に向けた新たな制度・体制の提案が、その最大の目標です。東京・国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれた第 1 回会議では、18 拠点の若手研究者のプレゼンテーション、アンカンファレンス形式でのディスカッションが行われ、21 年以降に目指したい社会の実現に向けた課題を示しました。その成果から、若手研究者が初期の企画段階から主体となって行う研究を支援する「COI 若手連携研究ファンド (若手ファンド)」も創設されました。

第 1 回会議の後、16 ~ 18 年度のホスト拠点となった北海道大学 COI は、期間中の目標として、①未来社会の創造を目指し、社会インパクトのある事業・研究提案の発掘、②人材育成、プロデューサーの発掘・育成、③ハイリスク・ハイインパクトのテーマ創造——の 3 点を掲げています。今回の第 2 回会議は、その実現の第 1 段階と言える取り組みで、COI 終了後の研究および社会実装の核となる人材、テーマ、事業化のアイデアを実際に掘り起こし、選抜することを課題として設定しました。

## 日本の「イノベーションのシステム」を

初日 (DAY1) の開会式では、小宮山委員長が「(それぞれの) 拠点の中で頑張れ頑張れと言っても限界があり、拠点を越えた若手の連携が不可欠。そして日本社会に (イノベーション) のいいシステムを作るには、若手からいい試みがどんどん起こらないといけない。今日聞くプロジェクトが全部成功するとは思っていないが、ものすごくうまくいくのが一つ二つ出れば、前に進める。価値ある議論を聞かせてください」と挨拶。続いて、ホスト拠点・北海道大学 COI のプロジェクトリーダーの吉野正則 (日立製作所) が「今日からビジョン 1,2,3 (の若手研究者) が集まって 3 日間を過ごしてもらいます。1,2,3 は足してもかけても 6。

人から言われて、少子高齢化の問題を解きなさいと言われたから、ビジョン 1 をやっています、じゃなくて、皆で『ビジョン 6』、新しい研究開発をこの中で作ってください」と参加者を激励しました。



左: COI STREAM ガバニング委員会 委員長 小宮山宏氏  
右: 北海道大学 COI 拠点 プロジェクトリーダー 吉野正則

## 投資家を口説くように——30人が「ピッチ」に登壇

今回のプログラムは、課題である人材、テーマ、アイデアの選抜のために、ビジネスの現場で行うプレゼンテーションやディスカッションのノウハウが積極的に導入されています。例えば参加研究者全員によるワークショップは、北海道大学 COI の中核機関、日立製作所のファシリテーターが中心となり新規事業企画やグループ企業間の横串連携などの際に行う「目的工学 (purpose engineering)」という手法を下敷きにしてプログラムをデザインしました。

まず初日、開会式とオリエンテーションの後に間を置かず、18 拠点に所属する研究者や URA などの 22 テーマと「若手ファンド」採択課題研究の 8 テーマ、計 30 テーマ 31 人がそれぞれの研究の実現目標、実施予定についてプレゼンテーションを行いました。ここでは、事実や情報を解説する一般的なプレゼンではなく、シリコンバレーの起業家が、短時間で自分のアイデアを示しながら投資家を説得するスタイルから生まれた「ピッチ」という形式を採用しました。発表者は持ち時間 5 分で、研究の背景、アウトライン、持っている技術と知見、そして目指す姿を「自分ごと」として語ります。短時間のピッチでは、話の内容自体に加えて、話し方、表情、身振りなどの“演出”も結果を大きく左右すると言われます。北海道大 COI は、このスタイルでの議論の経験が豊

富な吉野 PL を中心に、発表者全員に事前の「ピッチリハーサル」を課し、その質を高めてきました。

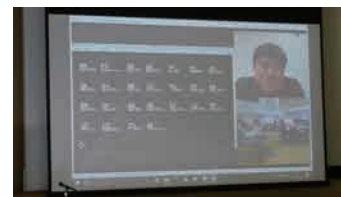
30 テーマの提案内容は、医療や健康に関わるものが多数を占めましたが、アート、ロボット、材料、環境など各拠点や研究者の個性が表れた多様なラインナップになり、COI を含む研究支援の制度に関する提案も 5 案、提出されました。すべてのピッチが終わると、90 人近い参加研究者全員による「共感投票」が行われました。これは文字通り、「彼の話は面白かった」「一緒に課題に取り組みたい」などと、自分が共感できる提案に相互に投票するものです。投票で上位に選ばれた提案は、自分たちの仲間に取り組みたい提案者を指名する権利を持ちます。これらのプロセスを経て 30 テーマは 10 テーマのグループに再編、集約され、初日のプログラムを終えました。

この日、会場には文部科学省の伊藤洋一・科学技術・学術政策局長も参加。初日のクロージングに際し、「期待をしてここに来たが、その期待を上回る内容のものでした。COI の構想、枠組みを超えたものになりつつあると思います。次回以降、文科省の若手職員も派遣しますので、議論に参加させていただこうと思います」と提案がありました。

## イノベーションが生まれる土壌とは

2 日目 (DAY2) はマサチューセッツ工科大学 (MIT) メディアラボ所長で、COI STREAM ガバニング委員会委員も務める伊藤穰一さんの講演で開幕。午後には、ベンチャー投資家で多くのスタートアップ企業を支援している小笠原治・株式会社 ABBA Lab 代表取締役の講演も行われました。演者は 2 人もアカデミアや企業で芽生えた小さなシーズを、ベンチャーとして育てた実績を豊富に持ちます。今回は参加者からの質問にも丁寧に答え、伊藤さんからは、科学者がベンチャーマインドを持って起業する意味と価値、ソフトウェアのオープンソース化に続いて、ハードウェア、バイオテクノロジーの分野でも同じ流れが起きていること、アカデミアの中で権威や専門性に埋没することの危機などが語られました。一方、小笠原さんからは、プロデュースを担当した DMM.make の事例を中心に、大学や企業の若い研究者が古巣を飛び出してスタートアップ企業を立ち上げていく経緯、投資家が起業家や研究者に投資をする“真の意図”など、「正面からは聞けない話」が次々と披露され、参加研究者の起業マインドを刺激する話題が続きました。

講演を間に挟む形で、この日は終日、「対話の場」としてオープンなディスカッションが展開されました。前日に再編された 10 グループごとに、ファシリテーターの助けを借りながら、各グループの「目的」を絞り込む作業が行われました。特に、今持っている知識、知見、材料に基づく個人的な夢、希望などの「小目的」と、大きく世界、社会などに貢献する究極の「大目的」をつなぐ「中目的 = 駆動目標」を設定することが、各チームの課題実現のカギになるとの示唆を受け、それぞれの「中目的」を言葉やイラストに落とし込む作業が続けられました。



左：MIT メディアラボ 所長 伊藤穰一氏

右：(株)ABBA Lab 代表取締役 小笠原治氏





## 2017年11月の「オーディション」に向けて

最終日、ディスカッションの成果が発表されました。ポスターセッションの形で、10枚の手作りのパネルが円形に並ぶ中、全員が立って5分ずつの発表が行われました。評価者側には、小宮山委員長、吉野 PL のほか、構造化チームから水野・名古屋大学総長補佐、江渡浩一郎・産業技術総合研究所企画主幹、梶川裕矢・東京工業大学大学院准教授、北海道大学 COI の玉腰暁子・研究リーダーらが参加し、すべての成果に対して一つずつ丁寧なコメントで答えました。

全体講評で吉野 PL は「ホスト拠点に手を挙げた時に大きな野望がありました。実はこの COI2021 会議を全国 18 拠点、19 番目の構造化チームに次ぐ 20 番目の COI 拠点にしよう、独立させて運営していこうと考えています」と新たな提案を披露。そのうえで「皆さんと一緒に作ってきたものは、自分たちで運営もやればいい。皆で拠点をもう一つ作るという気持ちでいれば、メンバーの入れ替わりがあっても問題はないでしょう。それが僕らの新しい活動につながっていくと思います」とのビジョンを述べました。

続く閉会式では、今後の COI2021 会議のスケジュールが公開されました。17年6月に東京で今回の議論を引き継ぐ会議を開催。10 テーマの研究計画を実装するために、資金調達まで視野に入れた具体的な議論を詰める場とします。続いて 11 月には、「COI2021 会議オーディション」を東京において開催予定で、ここでは投資家や企業の事業戦略担当を多数招き、参加研究者との具体的なマッチングまで行う方針です。

3 日間のプログラムを終え、小宮山委員長は「世界のスピードについて行けない日本は鎖国しちゃえと、最近僕は言い続けてきた。問題の根源はコミュニケーション。日本は上のやつ（上司）にモノを言わない。ゆっくりした時代ならそれでもいいが、変化の速い時代ではダメだ。しかしこの 3 日間でこれなら鎖国せずとも日本はやっていけるんじゃないかと思っている。明るい気持ちで眠れる。お礼を言いたい」と述べ、参加者全員の大きな拍手で 3 日間の議論を締めくくりました。